岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第151集

比爪館跡発掘調査報告書

国道４号拡幅工事関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

比爪館跡発掘調査報告書

国道４号拡幅工事関連遺跡発掘調査

序

広大な面積を有する本県は、縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、7,600カ所に及ぶ遺跡が確認されております。これら先人の残した文化財を保護し、保存してゆくことは県民に課せられた責務であります。

一方、現在の生活を豊かにし快適な生活を送るための地域開発、とくにその基幹となる道路をはじめとする交通網の整備もまた県民の切実な願いであります。本県を縦断する一般国道4号の拡幅は、産業経済発展の大動脈として多方面から期待されるところであります。

このような埋蔵文化財の保護と開発との調和ある施策も今日的課題であり、当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センター創設の趣旨にもとづき、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、その記録を残す措置をとってまいりました。

一般国道4号の紫波地区拡幅工事に関連する遺跡は、6遺跡があり、すでに5遺跡は調査を終了しております。

本報告書は、昭和63年度に発掘調査を行った比爪館跡の調査結果をまとめたものであります。

この報告書が斯学の研究のみならず埋蔵文化財に対する理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成に御援助、御協力を賜りました建設省東北地方建設局岩手工事事務所、紫波町教育委員会をはじめ、関係各位に心から感謝申し上げます。

平成3年1月

財団法人　岩手県文化振興事業団
理事長　中村　直

例　言

1．本報告書は、岩手県紫波郡紫波町南日詰字箱清水151-1ほかに所在する比爪(ひづめだて)館跡の発掘調査結果を収録したものである。

2．本遺跡の発掘調査は、国道4号の紫波地区拡幅改築事業に伴う緊急発掘調査である。建設省東北地方建設局岩手工事事務所と岩手県教育委員会文化課との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターと岩手県教育委員会文化課が実施した。

3．遺跡の岩手県遺跡登録台帳番号と調査時の遺跡略号は、次のとおりである。

　　登録台帳番号……LE77-0091

　　遺跡略号……HD-88、HD-89

4．野外調査は、昭和63年6月1日～6月21日と平成元年5月30日～6月10日に実施し、それぞれ佐々木嘉直・高橋義介、高橋信雄・佐々木勝が担当した。

5．調査面積は、昭和63年度1,200 m²、平成元年度700 m²である。

6．室内整理は、昭和63年11月1日～11月30日と平成2年1月10日～1月20日に実施し、それぞれ高橋義介と高橋信雄が担当した。

7．検出した遺構は、溝跡1条、土壙4基、その他のピット20基である。

8．本報告書の執筆および編集校正は、それぞれ高橋義介、高橋信雄が担当した。

9．石質鑑定は、佐藤地質工学研究所の佐藤二郎氏に依頼した。

10．本報告書では国土地理院発行の5万分の1地形図、建設省東北地方建設局岩手工事事務所作製の千分の1用地図を使用した。

11．土層の色調観察には、農林省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」を使用した。

12．発掘調査に際しては、次の機関の御協力と御教示を賜った。

　　建設省東北地方建設局岩手工事事務所

　　紫波町教育委員会

13．野外調査では、滝浦正蔵氏をはじめとする南日詰地区16名の方々の御協力をいただいた。

14．調査によって得られた資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

〈目　次〉

序
例言

〈本　文〉

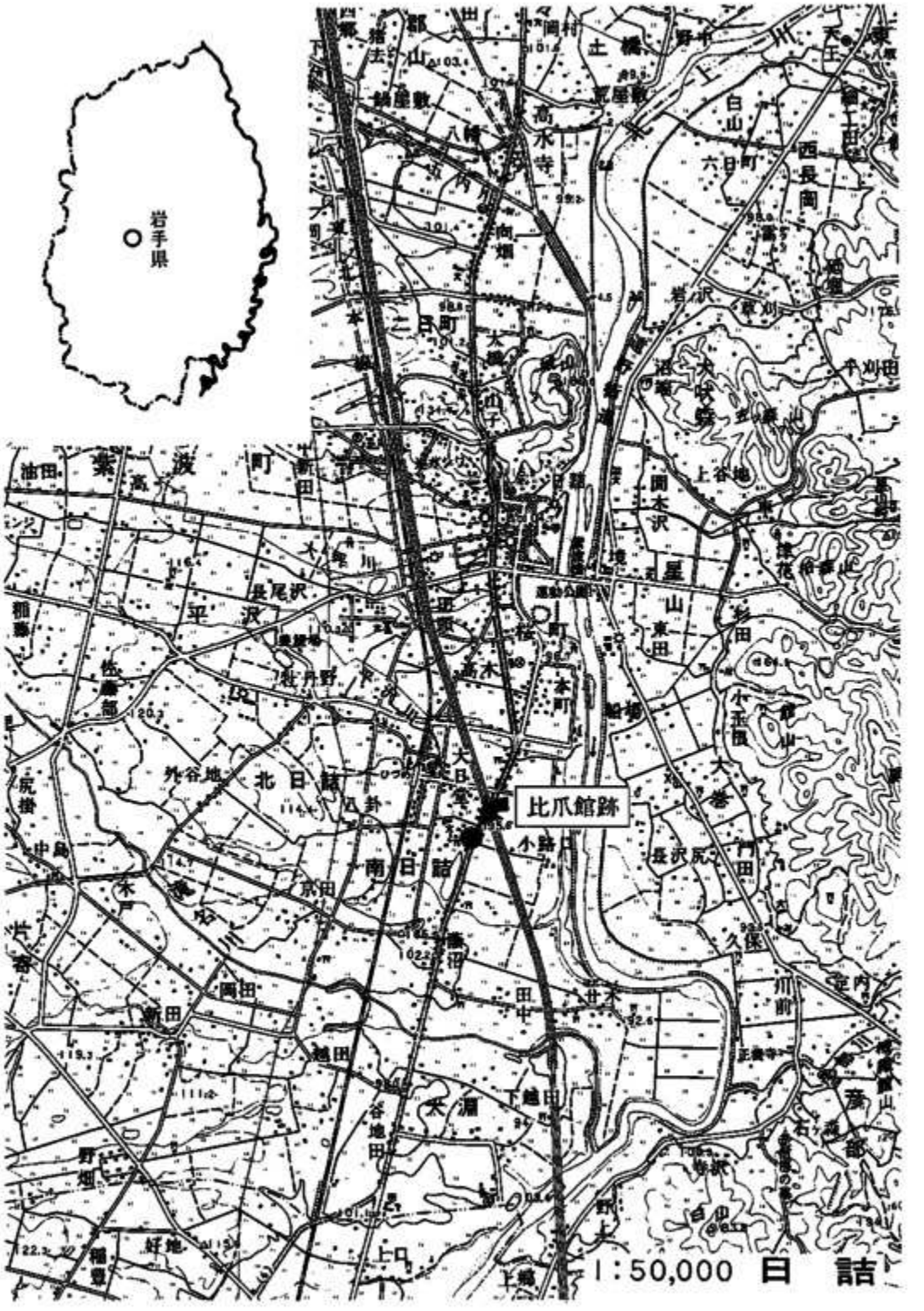
Ⅰ　調査に至る経過……2
Ⅱ　遺跡の立地と環境……2
　1．遺跡の位置……2
　2．地形……2
　3．基本層序……4
　4．周辺の遺跡……4
Ⅲ　調査の経過……5
Ⅳ　検出された遺構と遺物……6
　（A地区）
　1．溝跡……6
　2．遺物……11
　3．まとめ……11
　（B地区）
　1．土壙……12
　2．ピット群……13
　3．遺物……14
　4．まとめ……14

〈図　版〉

第1図　遺跡の位置……1
第2図　地形分類図……3
第3図　基本層序模式図……4
第4図　遺構配置図……5
第5図　1号溝跡……7
第6図　1号溝跡出土遺物（1）……8
第7図　1号溝跡出土遺物（2）……9
第8図　遺構外出土遺物……10
第9図　遺構全体図……15

〈写真図版〉

図版1　調査区近景……19
図版2　調査区近景……20
図版3　土層断面……21
図版4　1号溝跡……22
図版5　1号溝跡出土遺物（1）……23
図版6　1号溝跡出土遺物（2）……24
図版7　遺構外出土遺物……25
図版8　遺構……26
図版9　遺構……27
図版10　遺構……28
図版11　遺構全景……29



第1図　遺跡の位置

I　調査に至る経過

一般国道4号は東京都中央区から青森市に至る延長814 kmの我が国最長の国道であり、東北地方の大動脈となる幹線道路である。岩手県内ではバイパスなど拡幅工事等の改築事業が実施されており、県都盛岡市の南部に位置する紫波地区の拡幅工事は交通混雑の解消を目的に昭和61年度に着手された。同事業は紫波町大字犬渕字上田66-1を起点に同町北日詰字東ノ坊10-16の終点まで総延長2,000 m、幅員20～22 mであり、平成元年度に完了の予定である。

これに関連する埋蔵文化財包蔵地には伝善知鳥館跡、南日詰遺跡、比爪館跡等の周知の遺跡が所在し、これらの取り扱いについては建設省東北地方建設局岩手工事事務所と岩手県教育委員会との間で分布調査を含めて協議された。

これにより、岩手県教育委員会は昭和63年度に比爪館跡1,200 m²の調査を岩手県文化振興事業団の委託事業にすることとした。

これをうけて当埋蔵文化財センターは、昭和62年4月1日付け及び昭和63年4月9日付け委託契約により、発掘調査に着手したものである。

その後、追加買収された北側の700 m²については、平成元年度に岩手県教育委員会文化課が実施することとなった。

II　遺跡の立地と環境

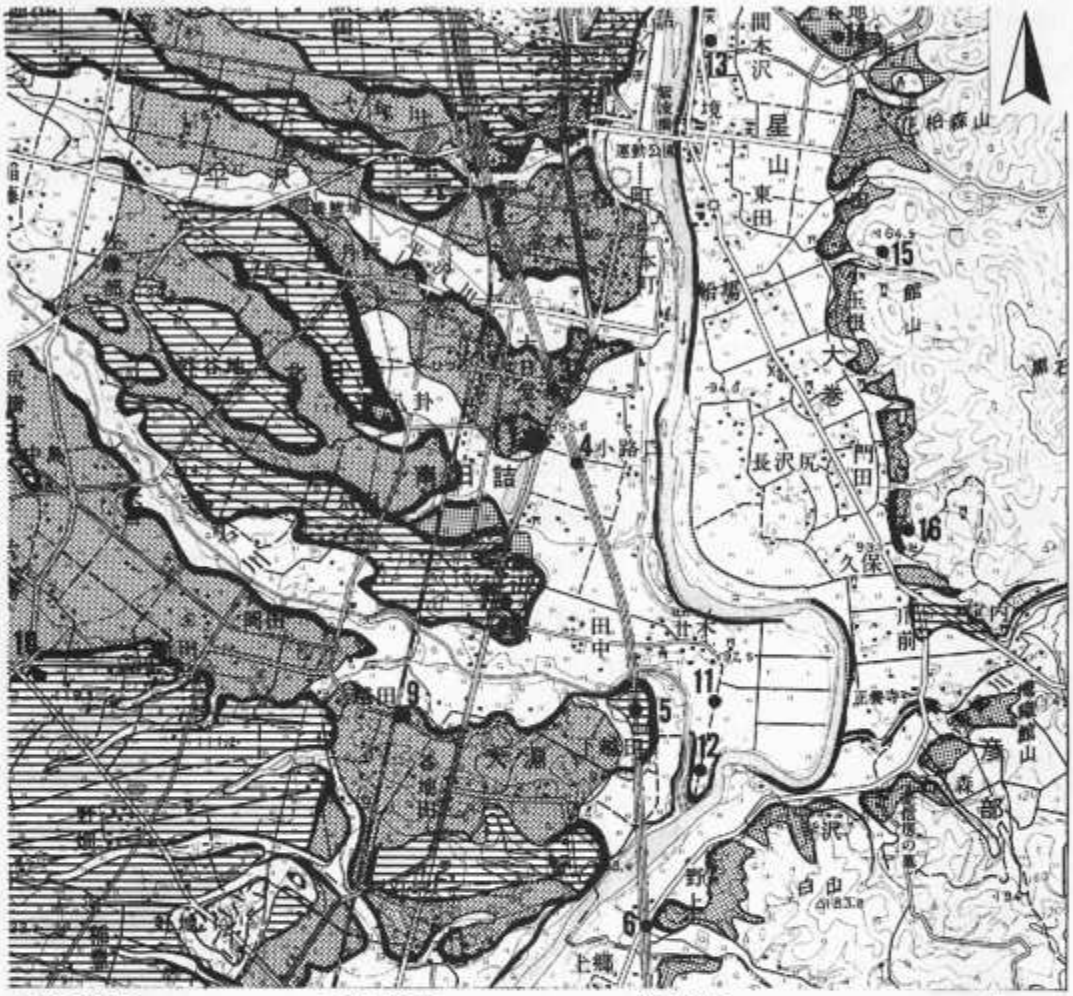
1．遺跡の位置

今回調査した比爪館（ひづめだて）跡は、東日本旅客鉄道東北本線日詰駅東側600 mの国道4号沿いに位置している。遺跡の所在する紫波町は、県都盛岡市から南方約18 kmにある。町の中央部を北上川が南流し、東北本線と国道4号が南北に縦断している。総面積238.32 km²で東側は大迫町、西側は雫石町、南側は石鳥谷町、北側は矢巾町・都南村と隣接する。

国土地理院発行の5万分の1地形図「日詰」（NJ-54-13-15）の図幅に含まれ、北緯39度31分54秒、東経141度10分8秒付近にあたる。

2．地形

周囲の地勢を概観すると、中央部は南北に北上河岸低地がのびており、東縁を北上川が南流している。東側は丘陵地が北上山地西縁部に連なり、西側は奥羽山脈の山麓から東方に丘陵地と段丘（台地）が広がっている。北上川は県北の七時雨山（ななしぐれ）（標高1,060 m）に源を発し、北上・奥羽両山系を東西に二分して、北上河谷帯を南北に縦断する全長243 kmの大河で、盛岡以北を上流、盛岡～一関を中流、一関以南を下流域と3区分されている。遺跡の所在する紫波町は、北上川中流域北部に位置する。北上川以西には、広汎な段丘群の発達が見られる。これは奥羽



No	遺　跡　名	時　　代	No	遺　跡　名	時　　代
1	比爪館跡	集落跡・館跡・平安～中世	9	片寄越田遺跡	散布地・縄文(中・後期)・平安
2	田頭遺跡	集落跡・平安	10	片寄野畑遺跡	散布地・縄文(後期)・平安
3	大日堂遺跡	散布地・縄文(後期)・平安	11	下川原Ⅰ遺跡	散布地・縄文(中・後期)
4	大銀遺跡	散布地・平安	12	下川原Ⅱ遺跡	散布地・縄文
5	西田遺跡	集落跡・縄文(早・前・中期)・平安	13	間木沢遺跡	散布地・縄文(後期)
6	野上遺跡	集落跡・平安	14	犬吠森遺跡	散布地・縄文(後期)
7	南日詰遺跡	集落跡・縄文(中期)	15	花立遺跡	散布地・縄文(中期)
8	伝善知鳥館跡	館跡・平安	16	彦部小学校敷地跡遺跡	散布地・縄文(後期)

第２図　地形分類図

山脈から流出している滝名川、太田川等の支流によって形成された大小の扇状地や旧河原が段丘化したものである。

これらの段丘は中川久夫[註1]氏らによって、石鳥谷段丘（高位段丘）、二枚橋段丘（中位段丘）、都南段丘（低位段丘）に分けられている。県南地域における西根・村崎野・金ヶ崎段丘に対比されるものである。

本遺跡は、北上川右岸の都南段丘縁辺部に立地し、東側は北上河岸低地が広がっている。標高は94～95m前後である。

註1　中川久夫・他（1963）「北上川中流沿岸の第四系および地形」『地質学雑誌』第69巻第812号

3．基本層序

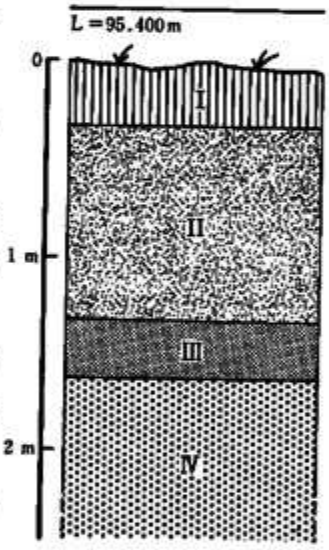
調査区域内は、第4図に示すように大部分が宅地跡で占められている。宅地は造成による盛土整地が行われていることから、土層の堆積状況に差異が見られる。本遺跡による基本層序は、次のように大別される。

Ⅰ層　黒褐色土（10 YR2/3～3/2）　表土で、層厚は10 cm～30 cm。

Ⅱ層　黒褐色～暗褐色土（10 YR3/2～3/3）　盛土層である。径2 cm～10 cm大の礫を多く含み、7層に細分できる。層厚は60 cm～1 m前後である。

Ⅲ層　黒色～黒褐色土（10 YR2/1～2/2）　粘土で、水酸化鉄が多く堆積する。上面が遺構検出面である。層厚は15 cm～30 cm。

Ⅳ層　黒色～緑灰色土（10 YR2/1～7.5GY5/1）　粘土の互層である。層厚は50 cm～1 m程で、下位は砂礫層に続く。



第3図　基本層序模式図

4．周辺の遺跡

紫波町内における遺跡は、「岩手県埋蔵文化財包蔵地一覧」や「全国遺跡地図」3岩手県等によれば256カ所余登録されている。第2図No1～16の遺跡は、東北新幹線と国道4号拡幅工事関連遺跡を中心に遺跡地図から抜粋したものである。

遺跡は、低位の都南段丘と中位の二枚橋段丘縁辺部や舌状台地の突端部に広く分布が見られる。縄文時代の遺跡は包蔵地や散布地が多く、調査例も少ないため実態は明らかではない。

5の西田遺跡からは、縄文時代中期の大規模な環状集落跡が発見されている。集落の中央部には舟底形土壙群が並び、その外周に長方形の穴列と竪穴住居跡が環状に配置している。墓域を

基本とする集落で、共同墓地、集団墓地としての性格をもつものであろうとされている。遺物は中期の大木8a式土器を主体とし土偶、土製品、石器、硬玉製大珠等が出土している。硬玉の原産地は北陸地方が考えられ、広範な交易を示唆するものである。7の南日詰遺跡では、縄文時代中期前葉の大木7b式土器に併行する住居跡が検出されている。

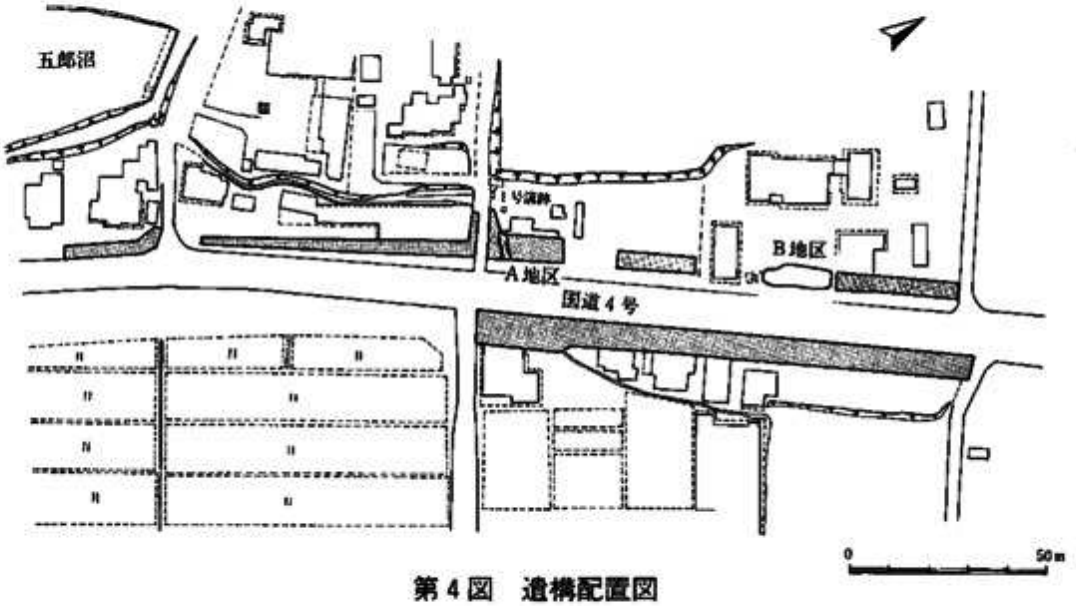
平安時代の遺跡も縄文時代と同様な立地状況を示している。1の比爪館跡は、『吾妻鏡』によって奥州藤原氏の一族である比爪氏の居館跡とされているところである。今回調査のほかに昭和40年11月の1次調査から断続的に9次調査まで行われ、平安時代中頃から中世にかけての遺構と遺物を多数検出している。平安時代前半の住居跡は、2の田頭遺跡(5棟)、5の西田遺跡(2棟)、6の野上遺跡(1棟)から検出されている。8の伝善知鳥館跡は、昭和38年の調査で柵列跡、空堀等の遺構が検出され、安倍氏につながりのある有力者の居館であることが明らかにされている。また、9世紀の城柵である徳丹城跡(813年)は本遺跡の北方約8.1kmに所在している。

III　調査の経過

6月1日　現場設営を行い、調査前の全景写真撮影後に雑物の撤去作業にとりかかる。調査区域の大部分は宅地跡で、土台のコンクリートや盛土層が厚く堆積するため、試掘トレンチ及び盛土除去には重機(ユンボ)を使用することとし、8日までの間に延べ5.5日間使用した。

6月2日　調査区域の数カ所に試掘トレンチを設定し、遺構検出面までの深さの確認と土層断面の観察を開始する。並行し土層断面の実測と写真撮影を行う。

6月3日　プレハブ建設の立合を行い、午後器材を南日詰遺跡から搬入する。



第4図　遺構配置図

6月 4 日　粗掘と並行して順次遺構検出作業を行う。

6月14日　溝跡の精査を開始する。

6月16日　溝跡の精査及び実測を終了する。

6月17日　調査区域内の埋め戻し作業を開始する。

6月18日　岩手県教育委員会事務局文化課の調査終了確認を受ける。

6月21日　発掘器材の搬出を行い現地を撤収する。

IV　検出された遺構と遺物

（A地区）

今回の調査で検出された遺構は溝跡が1条である。遺物は土師質土器、須恵器、陶磁器、木製品、石製品、古銭等が出土している。土器の大部分は小破片のものが多い。

1．溝跡

1号溝跡（第5～7図1～31、写真図版4～6）

調査区域の中央部西側で農業用水路に並行して位置している。検出面は宅地跡の盛土整地層下位である。東側は国道4号の下に続き、西側は調査区域外に延びるため規模の詳細は不明である。検出部分も削平等による攪乱が著しく曖昧なカ所も見られる。規模は上幅2.2 m、下場1.4 m前後、深さ20 cm～60 cmを測る。底面は比較的平坦で、緩やかな傾斜で立ち上がっている。

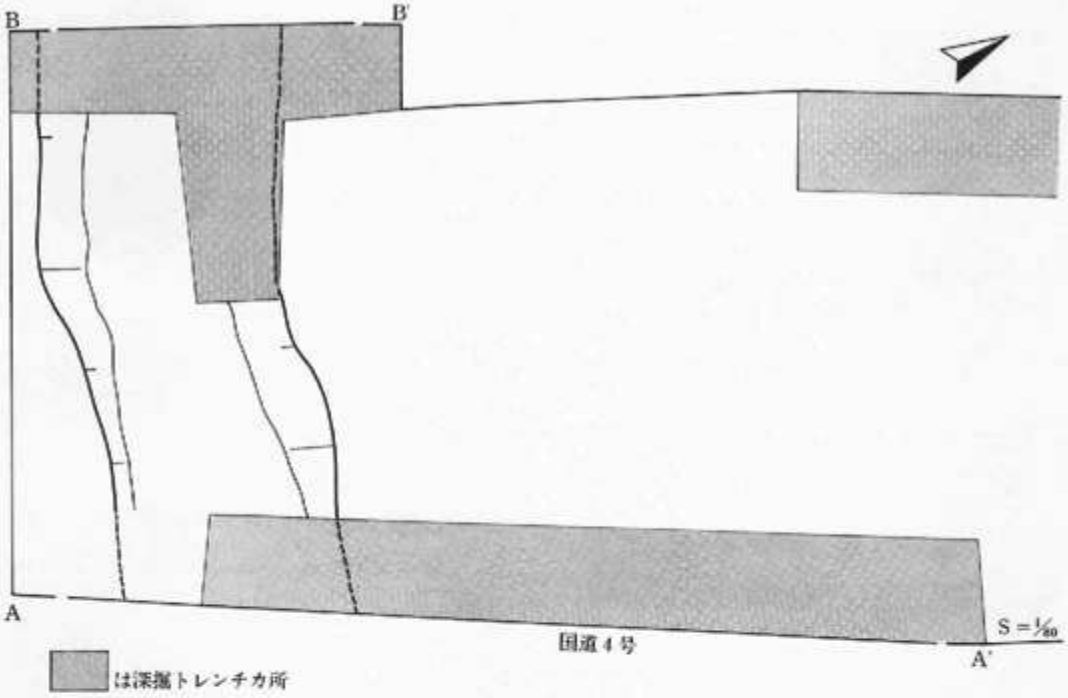
埋土は黒色～黒褐色粘土主体とする4層に大別され、上位に径10 cm～25 cm大の亜角礫を多く含み、下位に泥炭質の草木が堆積をしている。

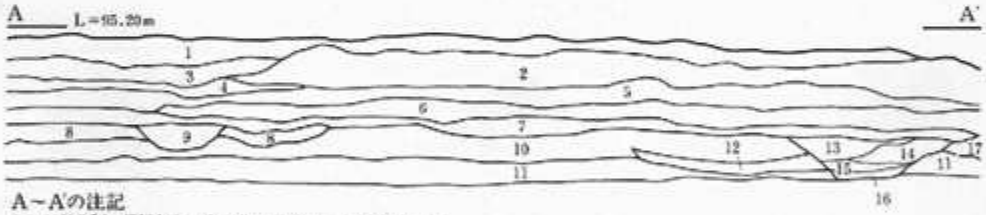
遺物は土師質土器（417点）を主体に須恵器（9点）、陶磁器（10点）、木製品（7点）が出土している。土器の大多数は小破片であるため掲載したのは24点である。1～20はロクロ成形の土師質土器である。1～5の底部成形は、指圧等による手づくねで丸底につくられている。2の口唇部は丸味があり、他は角ばっている。6～20の底部切り離しは回転糸切りである。胎土には石英砂と金雲母が含まれ、やや硬質を呈している。色調は橙色～灰白色である。

21と22は須恵器の坏で、21の底部切り離しは回転糸切りである。胎土は石英砂が多く含まれており、焼成もやや粗雑である。

23は小壺と思われる陶器で、表面上半と内面に暗緑釉がかかっている。24は消壺である。いずれも近世以降のものである。図化しなかったが擂鉢の小破片も4点出土している。

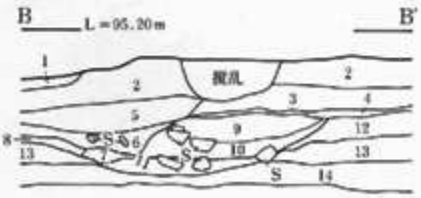
25～29は木製の箸で、いずれも欠損している。30と31は一部に加工痕のある木製品であるが、用途は不詳である。





A～A'の注記

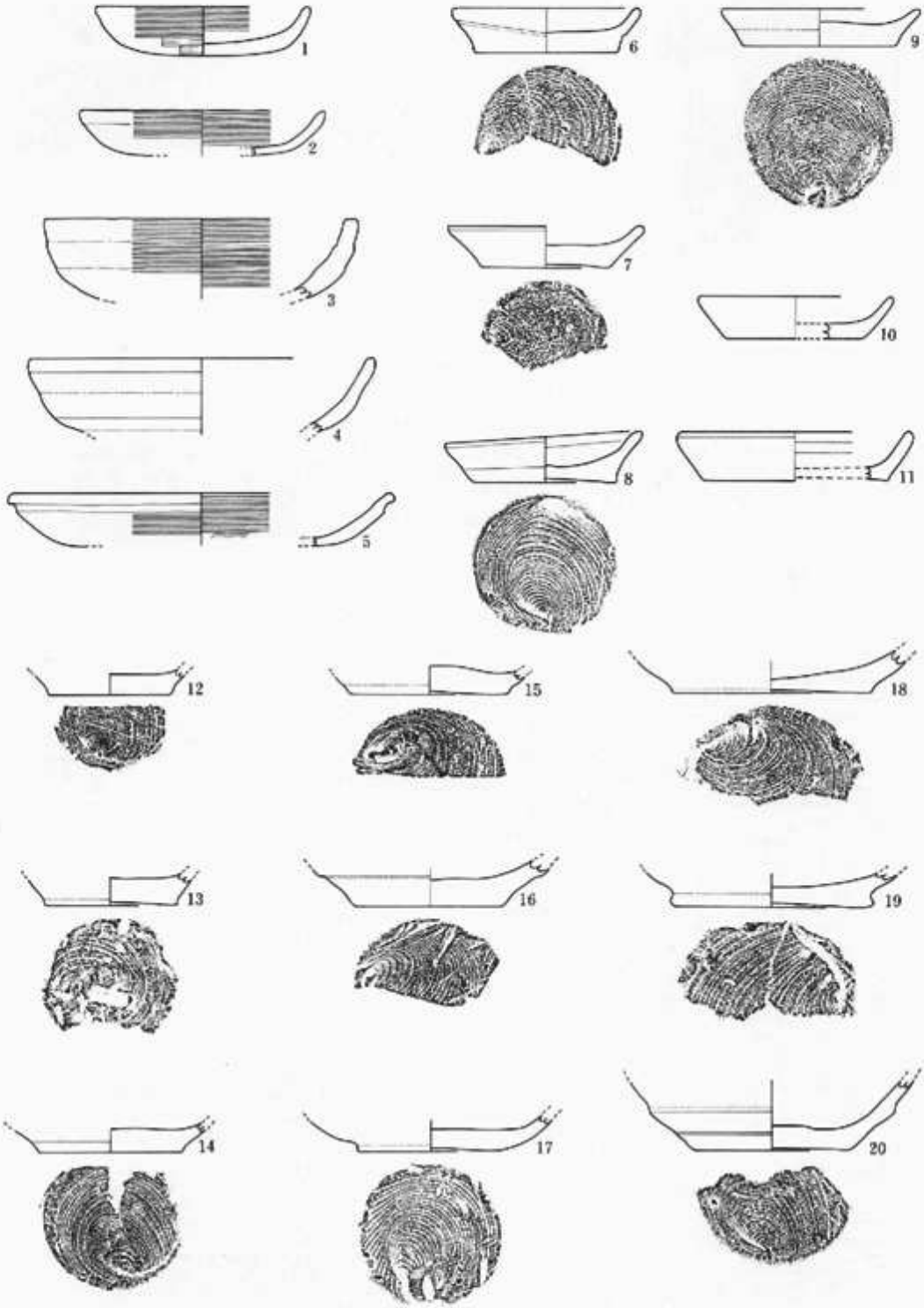
1. 10YR3/2 黒褐色土 砂・礫・コンクリートを多量に含む
2. 10YR3/3 黒褐色土 (盛土)
3. 10YR3/1 黒褐色土 (盛土)
4. 10YR3/3 暗褐色土 (盛土)
5. 10YR3/2 黒褐色土 (盛土)
6. 10YR3/3 黒褐色土 (盛土)
7. 10YR3/2 黒褐色土 粘土、水酸化鉄を多く含む
8. 10YR3/4 暗褐色土 粘土、黒色土を多く含む
9. 10YR3/1 黒色土 粘土、堅く締まる
10. N3/0 黒色土 粘土、旧水田面で水酸化鉄を含む
11. 7.5GY5/1 緑灰色土 粘土、黒色粘土との互層
12. 10YR3/2 黒褐色土 泥炭化した草・木が堆積したもの
13. 10YR3/2 黒色土 粘土
14. 10YR3/2 黒褐色土 粘土
15. 10YR3/2 黒色土 粘土、径2cm大の小礫を少量含む
16. 10YR3/2 黒色土 粘土、15層よりもやわらかい
17. 10YR3/2 黒色土 砂礫層



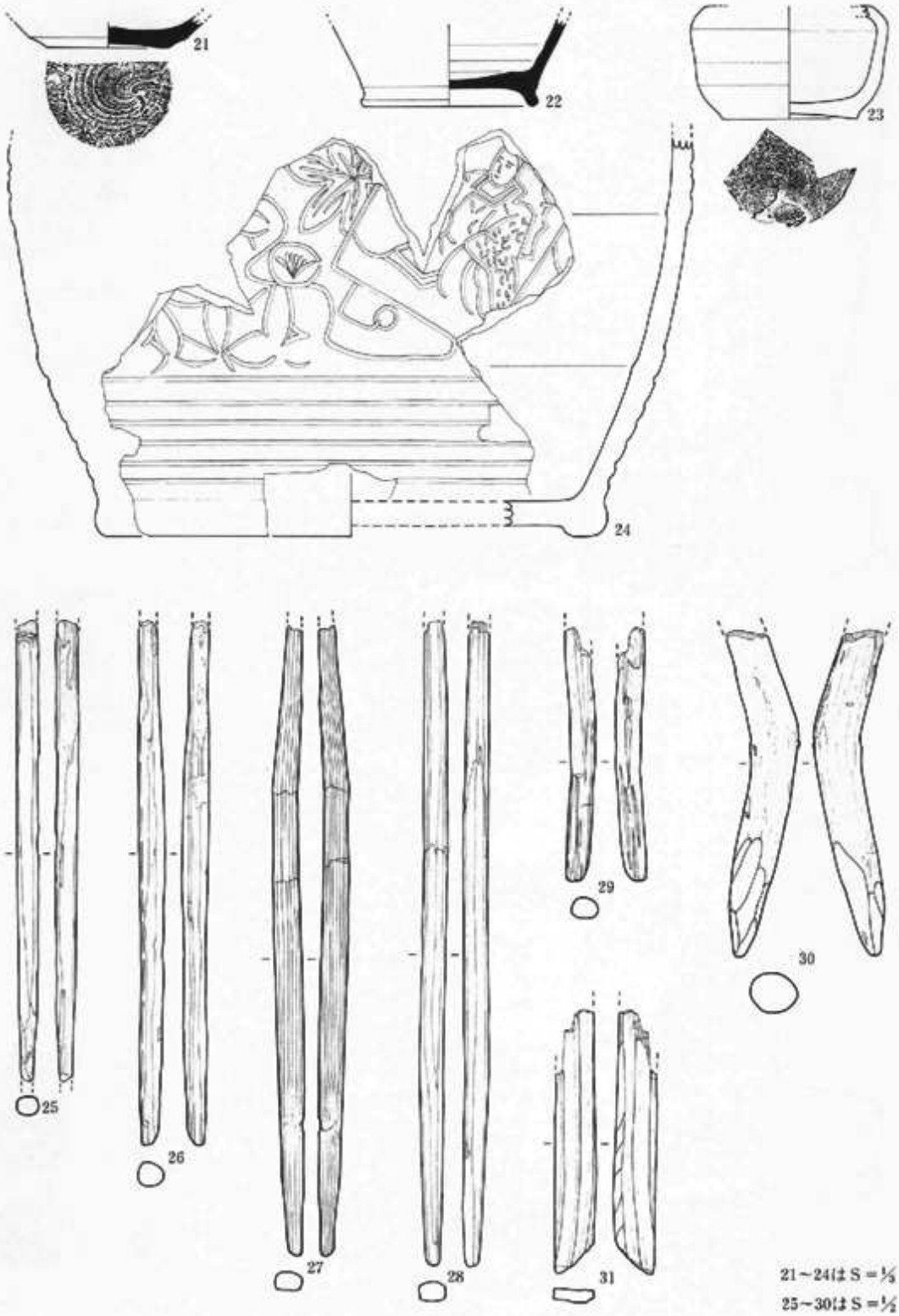
B～B'の注記

1. 5YR5/3 灰白色土 粘土、明黄褐色土を含む
2. 10YR3/3 黒褐色土 (盛土)
3. 10YR3/3 黒褐色土 (盛土)
4. 10YR3/3 黒褐色土 堅く締まり、水酸化鉄主体の層
5. 10YR3/1 黒色土 (盛土)
6. 10YR3/1 黒色土 径2cm～15cm大の礫を含む
7. 10YR3/3 黒褐色土 泥炭化した草・木が堆積したもの
8. 砂礫層 径1cm～8cm大
9. 2.5YR3/1 黒色土 粘土、緑灰色粘土起源で礫を含む
10. 2.5YR3/1 黒褐色土 粘土
11. 10YR3/3 黒色土 湿地の草・木が堆積したもの
12. 7.5GY5/1 緑灰色土 粘土、一部撹乱されている
13. N3/0 黒色土 粘土、緑灰色粘土の互層
14. 7.5GY5/1 緑灰色土 粘土

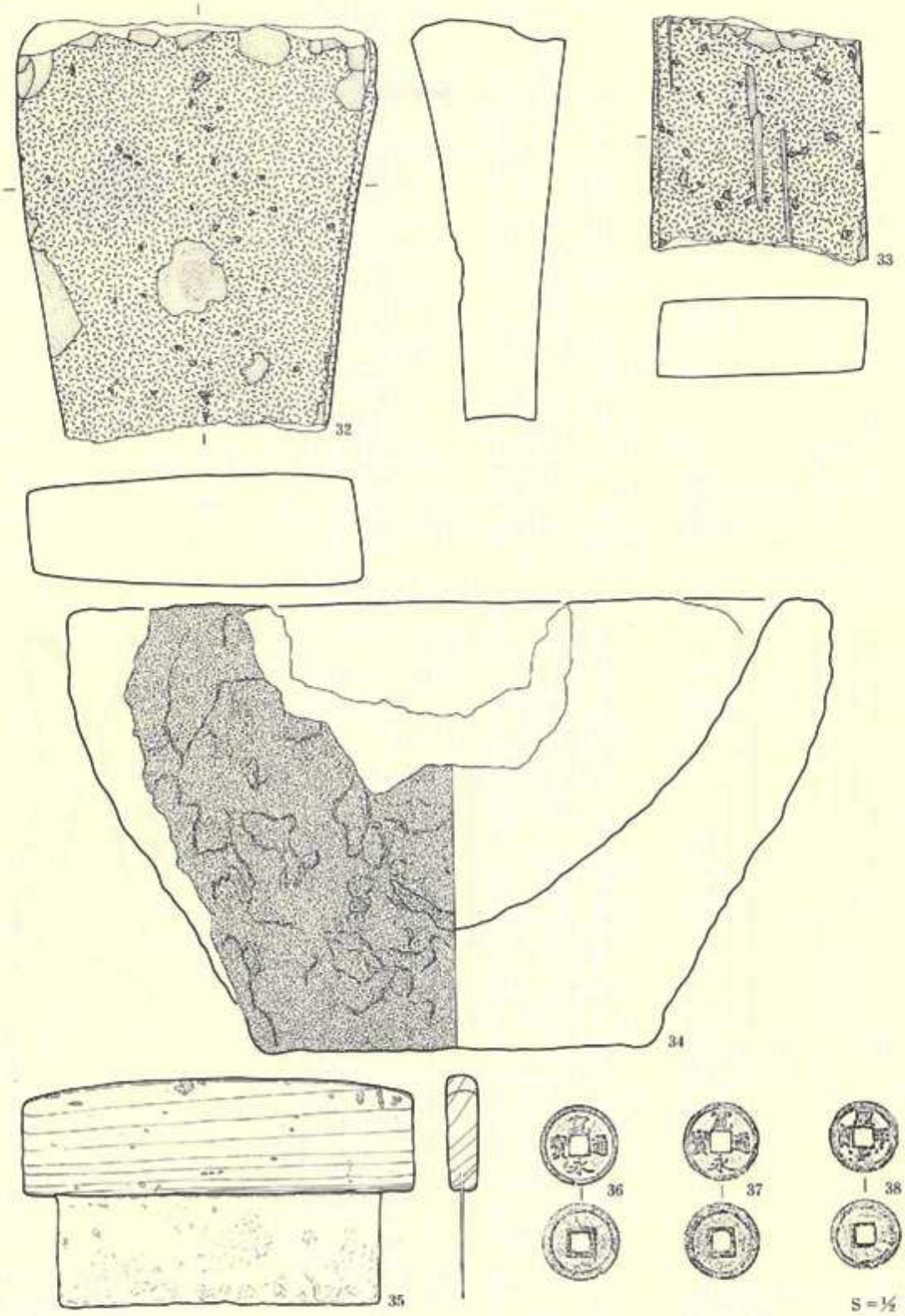
第5図　1号溝跡



第6図　1号溝跡出土遺物 (1)



第７図　１号溝跡出土遺物 (2)



第8図　遺構外出土遺物

2．遺物

遺構外から砥石、石鉢の石製品、古銭、オヒキ具が出土している。

(1)石製品（第8図32～34、写真図版7）

32と33は砥石である。32は折損しており、大きさは最大が縦12.5cm、横11cm、厚さ3.4cmのやや台形状を呈している。片面のみが良く使用されており、中央部が弧状になっている。33は両端部が欠損するものの、全面使用されている。縦7.6cm、横6.3cm、厚さ2.4cmで、断面形は長方形である。石質は流紋岩（奥羽山地）である。

34は現存3分の1程の石鉢で、体部中位から直立気味に口縁部に至り、口唇部はやや丸味を呈している。器高は13.6cm、推定される口径は23.4cm、底径11.8cmである。表面は荒い削り痕を残しているが、内面は磨滅で滑らかになっている。石質は両輝石安山岩（岩手火山）である。

(2)古銭（第8図36～38、写真図版7）

36と37は寛永通寶である。38は磨滅して平と寶が判読できるが、渡来銭と思われる。

(3)オヒキ具（第8図35、写真図版7）

35はオヒキ具及びオヒキ鋸と通称されるもので、麻の繊維を取り出す際に使用される。出土状況から近世以降のものである。大きさは縦7cm、横12cm、刃の厚さ1mm程である。手の握り部分は杉材を使用している。

3．まとめ

今回の調査区域からは、東西方向に延びる溝跡が1条検出された。埋土から近世以降の陶磁器と共伴して、12世紀に比定されるロクロ成形の土師質土器片が400点ほど出土している。いずれも器形は皿型で、機能的に炉明皿や祭祀具とされているものである。比爪館跡は第9次調査まで行われ、平安時代から中世にわたる遺構と遺物が集中して発見されている。同様な土師質土器も出土しており、溝跡は同時期の遺構とも考えられる。館跡の構造や周辺集落の時代考証は今後の課題である。

（B地区）

B地区の調査で検出された遺構は、皿状の土壙4基、円形状のピット6基(P_1～P_6)、不整形ピット6基(P_7～P_{12})、柱穴状のピット8個(P_{13}～P_{20})である。遺物は、土師質土器（かわらけ）が100点余り出土しているが、すべて小破片であるため実測できるものはなかった。また、これらの遺物は、出土状況からみて検出された遺構に伴うものとは考えられず、近世以降の整地等により混入したものと推定される。

1．土壙

ここで土壙としたものは、平面形が隅丸方形から長楕円形状を呈するもの或はそれに近い形状をもつと思われる比較的浅い皿状の遺構である。

土壙1は、近年における整地層下に在り、地山の黄褐色シルト層を掘り込んで作られており、深さは約15㎝を計る。埋土は、暗褐色土の単層で、磨滅したかわらけ片を含む。この土壙は、P_3・P_4・P_7によって切られているため形態は不明であるが、現存する部分で幅約2.8mを計る。床面は土壙2の上に延びていたが、その範囲を正確に捉えることが出来なかった。床面上にP_{15}及びその周辺に数個の拳大の石が検出されている。これらは土壙より新しいものである。床面は全体に柔らかい。

土壙2は、土壙1の下に在り、南側をP_4に切られている。土壙1と同様に地山の黄褐色シルト層を掘り込んで作られているが、床面はシルト層下位の礫層上面に至っている。中央部の深さは、黄褐色シルト上面より約20㎝を計る。規模は、推定で2.5×2mほどで、隅丸長方形を呈し、壁は緩やかな傾斜をもつ。床面は部分的にではあるが、灰色を呈しグライ化した部分もみられる。埋土は、灰色のグライ化層で、褐色シルトのブロックもみられる。埋土全体からまばらな状況でかわらけの小片が出土している。

土壙3は、長軸3.8m、短軸1.95mのやや不整の長楕円形の平面プランをもつ遺構である。深さは、中央で約18㎝、床面はほぼ平坦である。礫層上面が床面となっており、埋土、床面、壁等の状況が土壙2と極めて近似しており、遺構の性格は不明であるが、両者とも同様の性格をもつもので、同時に存在していた可能性もある。土壙の西辺にP_{16}があるが、この遺構より新しい時期のものである。

土壙4も他の土壙と同様に近年における整地層下に在る地山の黄褐色シルト層を掘り込んで作られている。ただ、規模や埋土等で他の土壙とやや異なる。北側及び西側は調査区外まで延びており、全体のプランは不明であるが、現存長で4×2mを計る。床面は、ほぼ平坦で、掘り込み面である黄褐色シルト上面よりの深さは18㎝前後である。埋土の上位は、ところどころに酸化物の沈澱がみられる灰色を呈するグライ化した層で部分的に黄褐色シルトのブロックを含

む。埋土の下位は、かなり粘性の強い灰色のグライ化層が堆積している。いずれの層からも磨滅したかわらけの小片が出土している。

2．ピット群

ピット群は、直径1m前後の円形プランをもつピットと不整形のピット群及び柱穴状の小ピット群に分けられる。

P_1は、直径1.2m程の規模をもつ円形プランのピットであるが、西半分は調査区外に在る。壁はほぼ垂直に近い立上りをもつ。遺構確認面である現存する黄褐色シルト層上面からの深さは41cmで、底は礫層上面となっており、水が僅かに浸み出して来る。P_1は、P_2によって切られており、P_2の補強のためと思われる粘土のブロックを含む暗褐色土によって一部埋め戻されている。上位の埋土は、酸化物の沈澱物の多くみられる暗褐色土で、下位はかなり粘性の強い灰色のグライ化層が15cmほど堆積していた。

P_2は、直径約1.5mほどの規模をもつ円形プランのピットであると推定されるが、西半分は調査区外に在る。このピットは、近年の整地層直下から掘り込みが確認されており、黄褐色シルト層を掘り、礫層上面まで下げられており、深さは約45cmを計る。壁はほぼ直立し、壁際には、タガ状の木片の付着がみられた。また、P_1を切って作られているため、ピットの外側に幅12cmほどの暗褐色土によって補強されている。埋土は、P_1とほぼ同様である。遺構内から、腐蝕のほとんどみられない加工痕をもつ木材及びかわらけの小片が出土している。

P_3とP_4は、それぞれ直径1.1m、1.3mほどの円形プランをもつピットであり、互いに接して検出されたが、切り合い関係は不明であり、同一時期の可能性もある。床面は、いずれも礫層上面まで掘り込まれているが、P_4の方が僅かに浅い。埋土は、暗褐色土の単層であり、P_3に加工されない木片が出土している。

P_5とP_6は、やや不整であるが直径約1mほどの円形状ピットであり、確認面からの深さは約30cmほどである。埋土は、褐色のシルト、黒色土のブロック、僅かなかわらけの小破片と炭化物を含む暗褐色の単層である。

P_7からP_{12}は、いずれも不整形のピットである。それぞれの遺構確認面からの深さは、P_7が19cm、P_8が18cm、P_9が5cm、P_{10}が8cm、P_{11}が11cm、P_{12}が12cmとなっている。埋土の大半は、暗褐色土を主体とする。

P_{13}からP_{20}は、いずれも柱穴状のピットである。調査区の南側に位置するP_{13}〜P_{18}の遺構確認面からの深さは、P_{13}が6cm、P_{14}が14cm、P_{18}が33cmを計る。これらと対応する柱穴は捉えられなかった。P_{18}の周囲には、このピットに伴う拳大の礫が数個検出されている。

また、調査区の北側に位置するP_{16}〜P_{20}の深さは、10〜20cmほどであり、P_{19}の周囲にはP_{15}

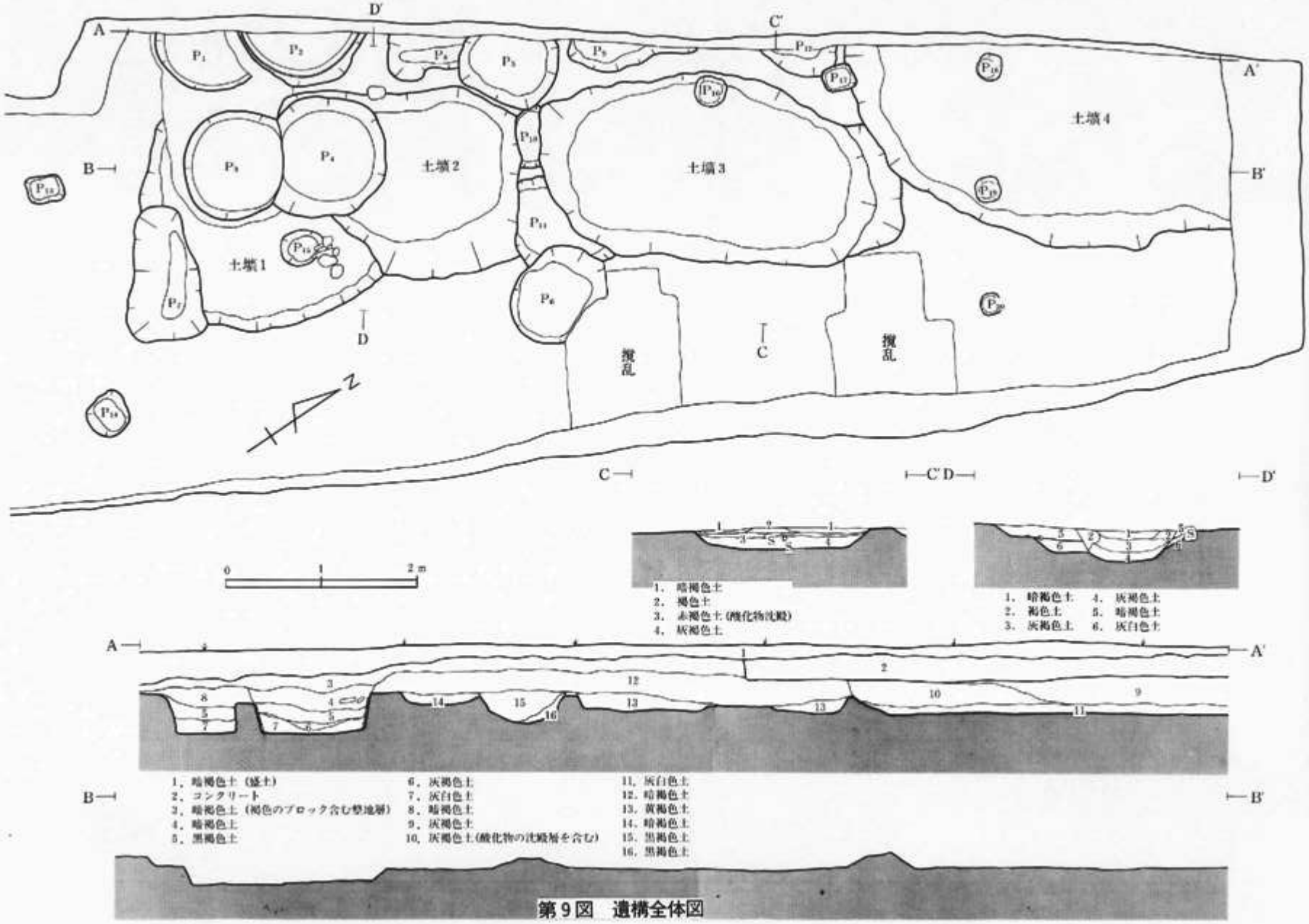
と同様の石が数個みられた。P_{16}～P_{18}は、南北方向に直列するようにみえるが、これらの柱穴の西側は調査区外にあり、東側には対応する柱穴は認められなかった。P_{16}とP_{17}の間は約1.4 m、P_{17}とP_{18}の間は約1.6 mを計る。また、P_{18}を軸としてこれらの柱列と直交する方向にP_{18}～P_{20}の柱穴が並ぶ。これらの柱列についても、その南側及び北側にも対応する柱穴は検出されなかった。P_{18}とP_{19}の間は約1.3 m、P_{19}とP_{20}の間は約1.25 mを計る。P_{19}には木柱が残存していたが、まったく腐触がみられず、鋭利なものによる平らな切断面が残されていた。これらの柱穴状のピットは、他の遺構よりもすべて新しく位置づけられるものである。

3．遺物

出土遺物の大半は、土師質土器（かわらけ）の破片である。この他若干の木材がみられた。かわらけの破片は100点余り出土しているが、そのほとんどは1～2 cm程度の小破片であり、かなり磨滅しており、原地性のものではない。その中でも比較的大きい破片をみると、底部が平坦で糸切り痕をもつものと、丸底風の手づくねによるものとがあり、しかもそれぞれには、大小のものがあると推定される。色調は、橙色～灰白色を呈する。これらの遺物は、まとまっての出土はみられず、近年の整地層と遺構内での埋土からの状況も同じであることなどを考えると、遺構の時期を決めるものでなく、二次的に混入したものと考えられる。また、加工された木材片も出土しているが、用途については不明である。

4．まとめ

B地区は、平安から中世にわたる遺構・遺物が検出されている比爪館跡の東端に位置すると考えられる。今回の調査区で検出された遺構はすべて、近世以降に相当するもので比爪館に関係する遺構は、検出されなかった。ただし、かわらけが出土していることから、近接したところにこれらに関連する遺構が残されている可能性が高い。今後周辺地域での詳細な調査を進めることにより、比爪館の範囲が明確になっていくものと思われる。


土壙1
土壙2
土壙3
土壙4
攪乱
攪乱
0 1 2 m
1. 暗褐色土
2. 褐色土
3. 赤褐色土(酸化物沈殿)
4. 灰褐色土
1. 暗褐色土
2. 褐色土
3. 灰褐色土
4. 灰褐色土
5. 暗褐色土
6. 灰白色土
1. 暗褐色土(盛土)
2. コンクリート
3. 暗褐色土(褐色のブロック含む整地層)
4. 暗褐色土
5. 黒褐色土
6. 灰褐色土
7. 灰白色土
8. 暗褐色土
9. 灰褐色土
10. 灰褐色土(酸化物の沈殿層を含む)
11. 灰白色土
12. 暗褐色土
13. 黄褐色土
14. 暗褐色土
15. 黒褐色土
16. 黒褐色土

第9図　遺構全体図

写真図版

北から

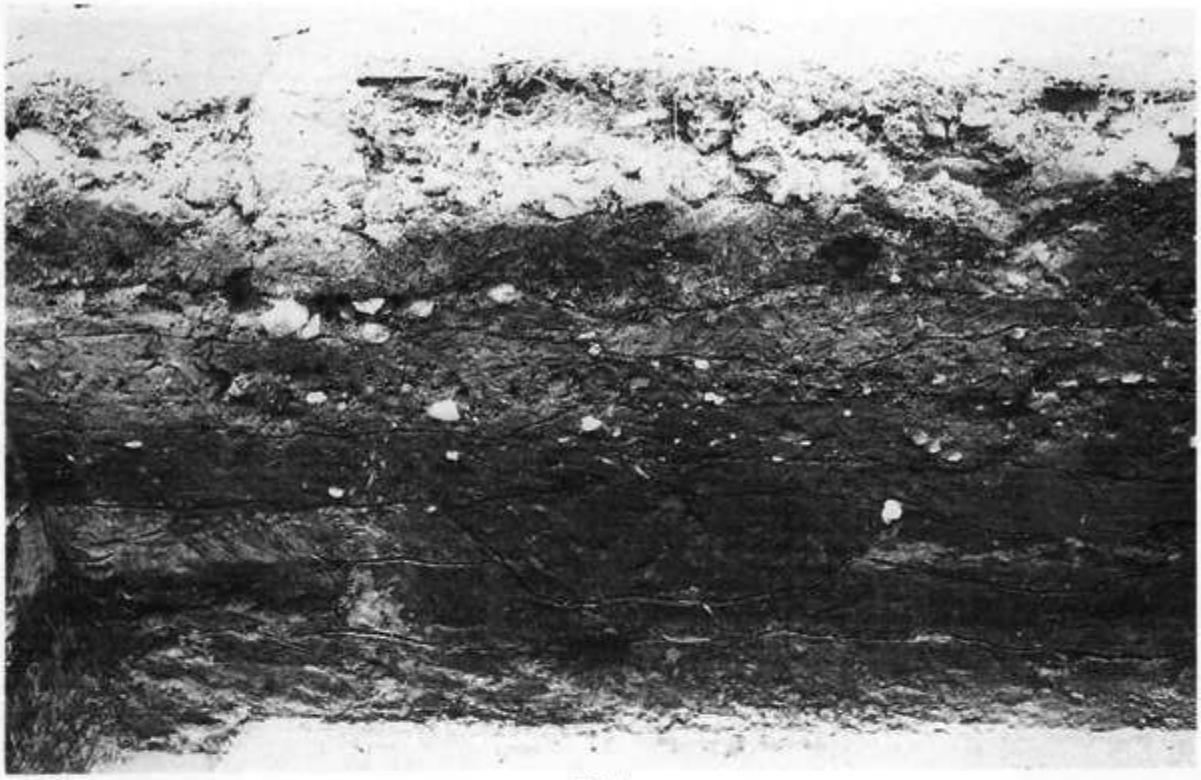
北から

写真図版 1　調査区近景

南から

南から

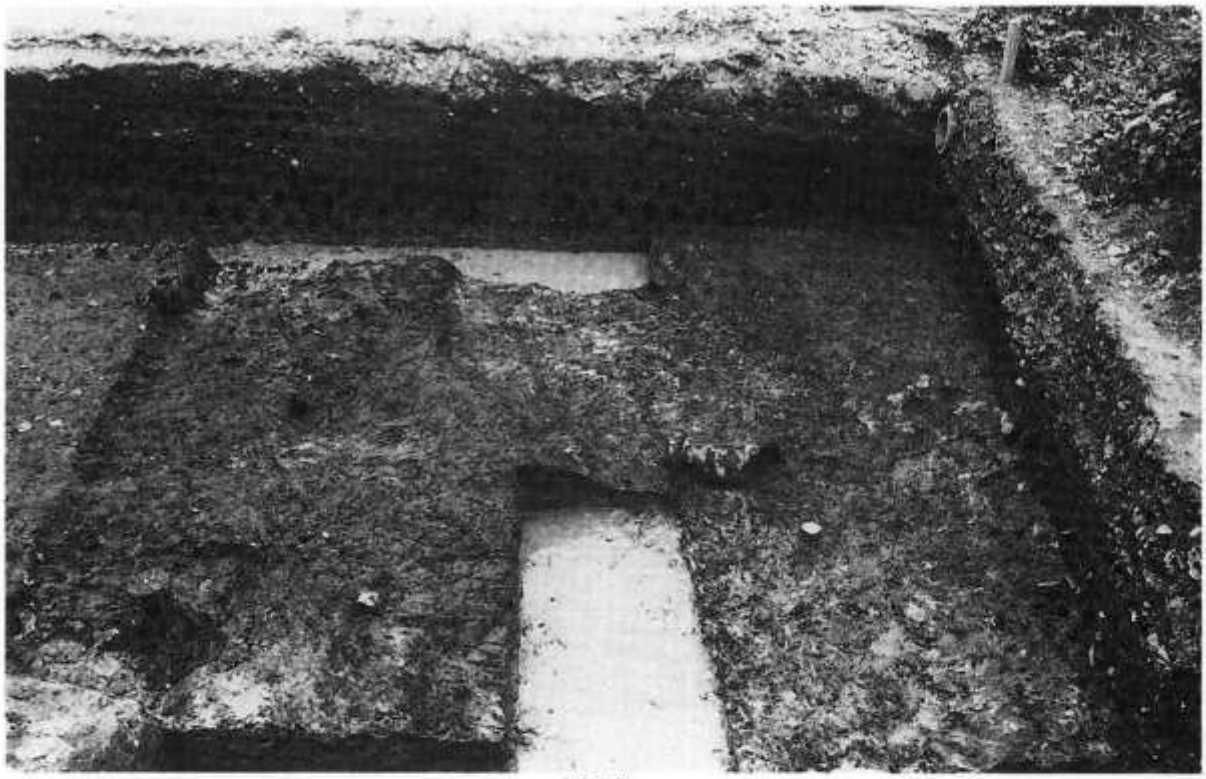
写真図版 2　調査区近景



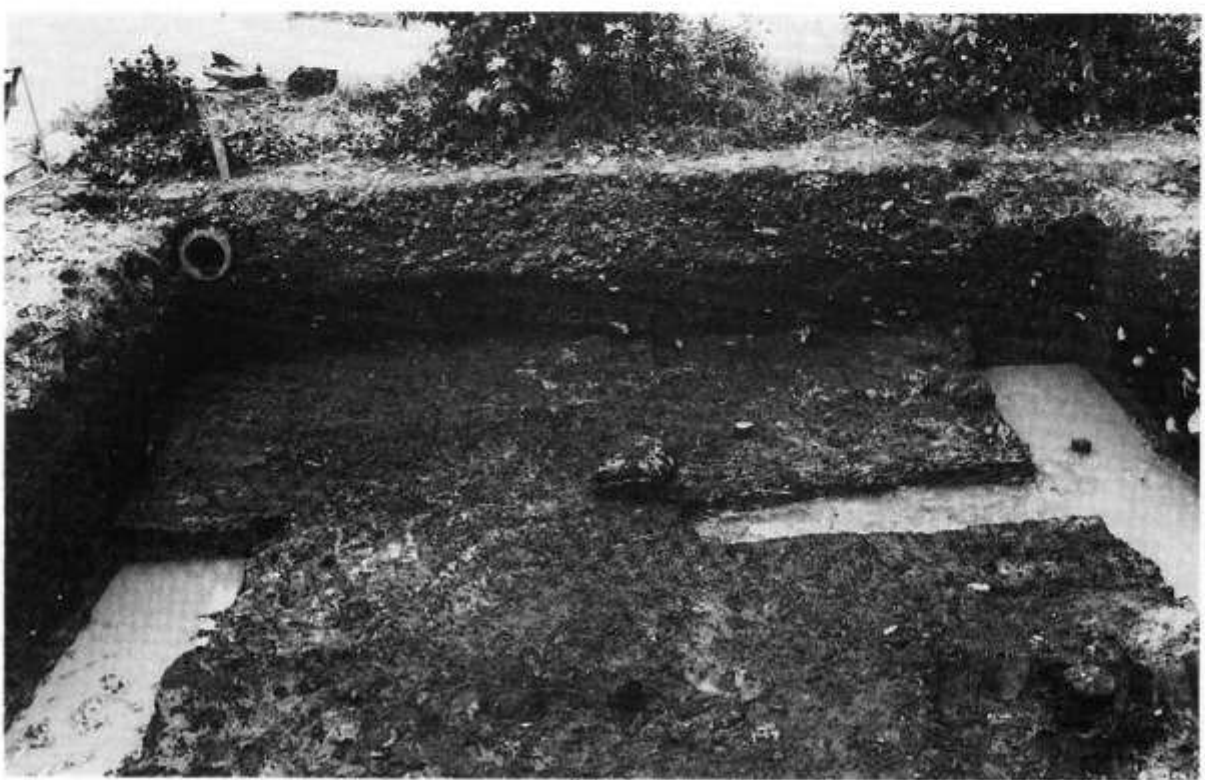
西から

東から

写真図版 3　土層断面

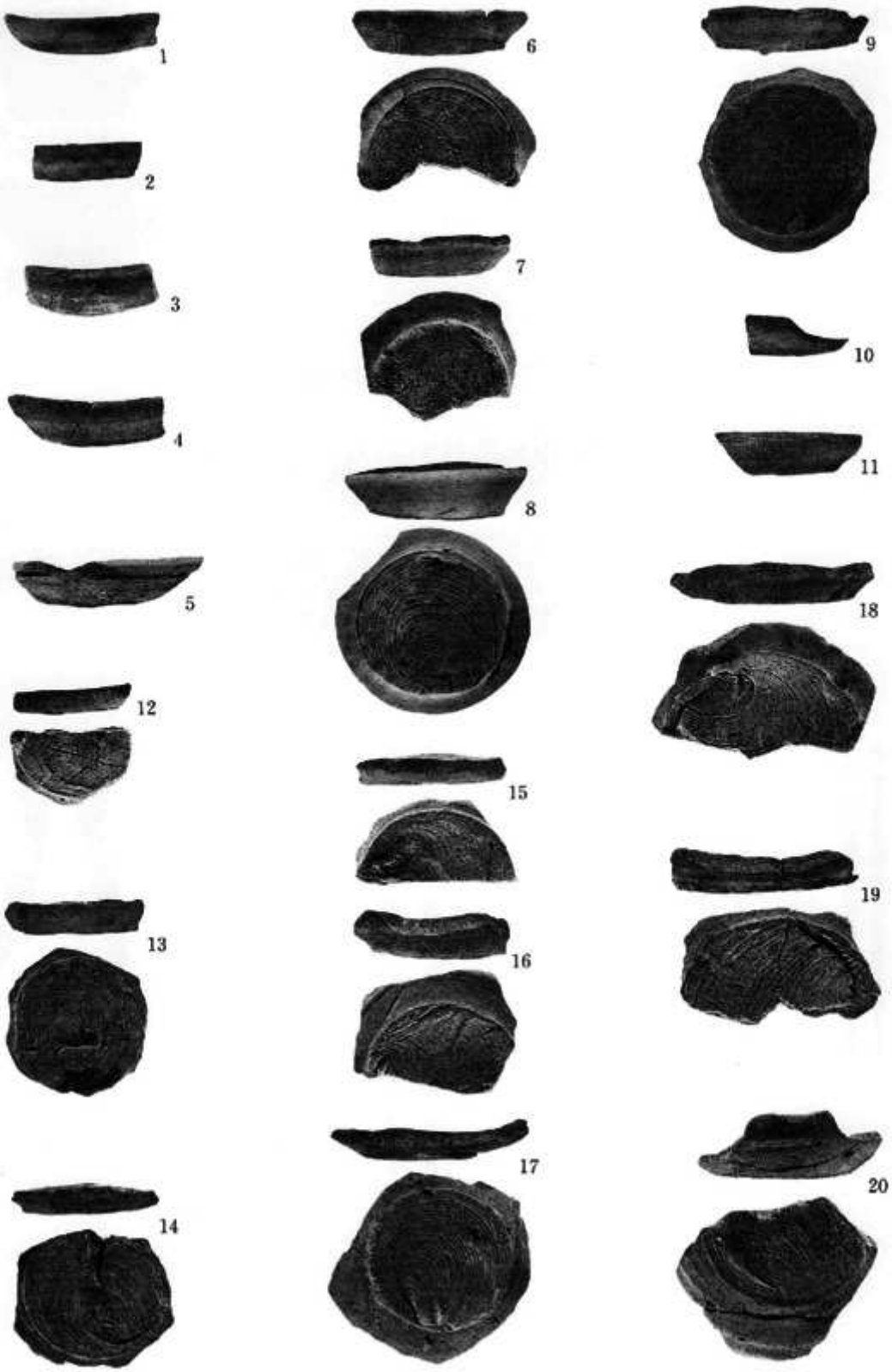


西から



北から

写真図版 4　1 号溝跡



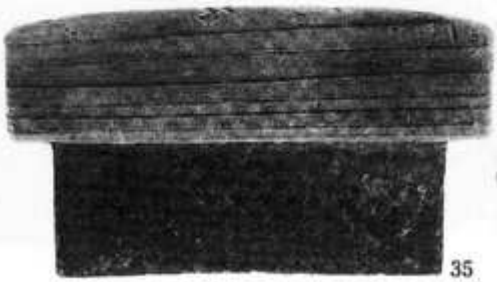
写真図版５　１号溝跡出土遺物（1）

写真図版 6　1 号溝跡出土遺物 (2)

32

33

34

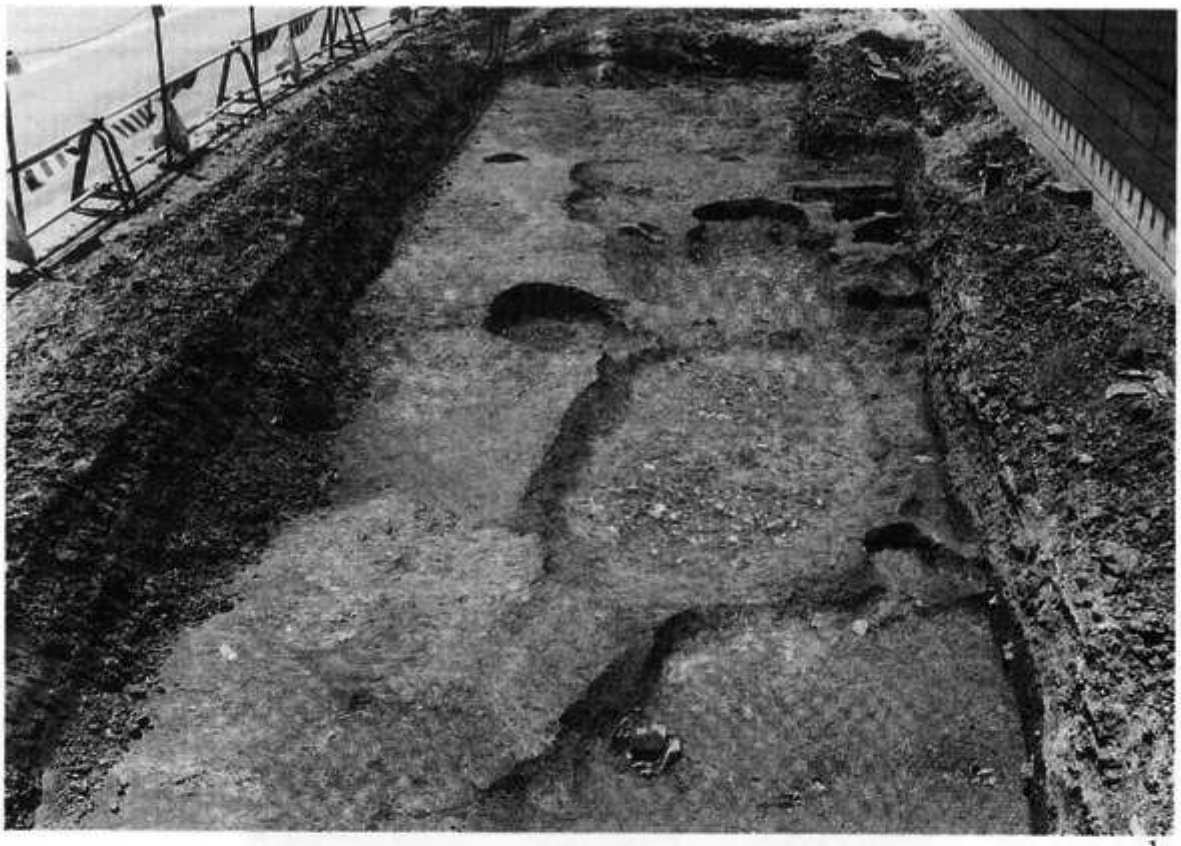

35

36

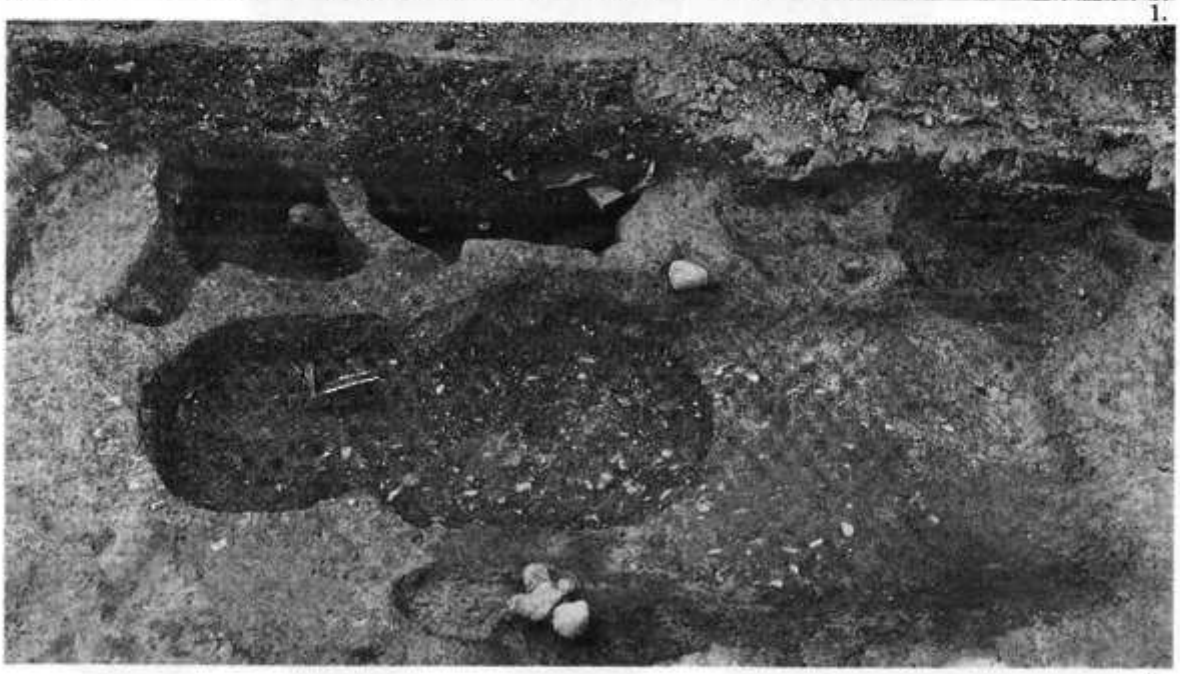
37

38

写真図版７　遺構外出土遺物



1.

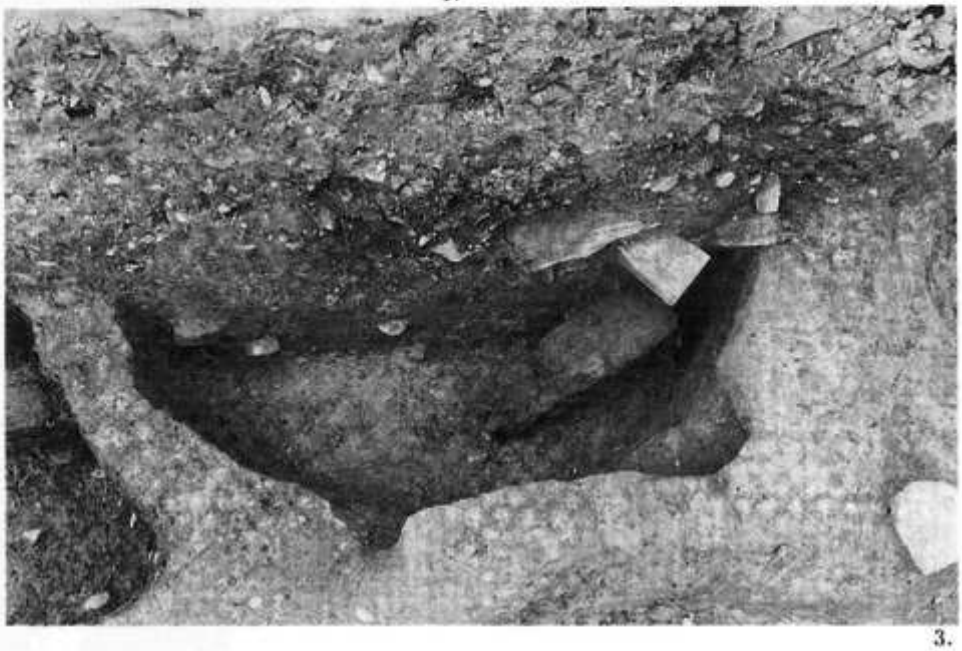


2.

写真図版 8　遺構　1. 全景(北から)・2. P_1～P_5(東から)

1.

2.



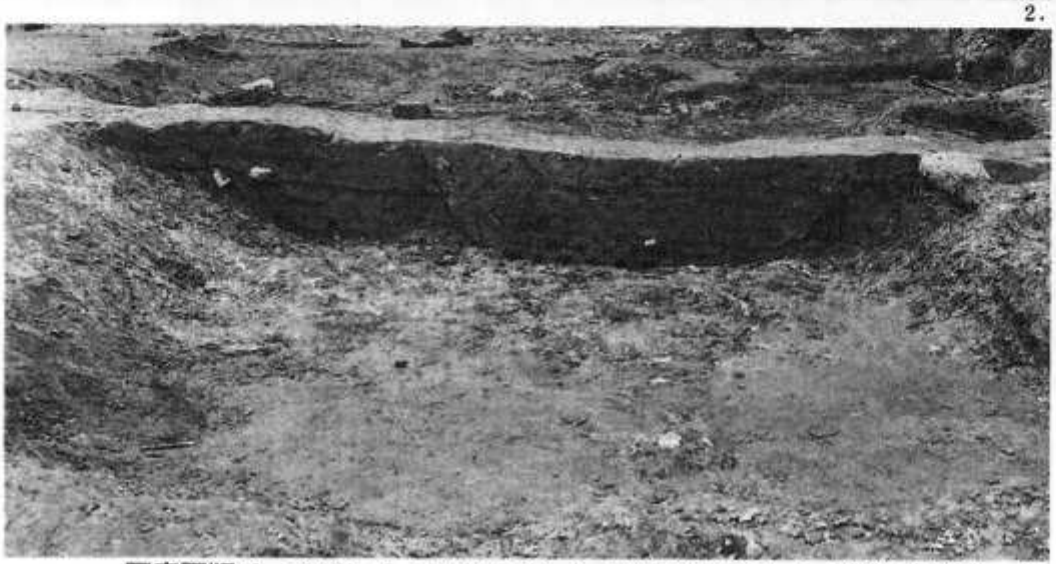
3.

1. P_1・P_2
(南から)
2. P_3・P_4
(南から)
3. P_2
(東から)

写真図版 9　遺構

1.

2.



3.

写真図版10　遺構1. P_1・P_2(東から)・2. 土壙2(東から)・3. 土壙2・P_4断面

写真図版11　遺構全景(北から)

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

理事兼所長	小笠原喜一		
副所長	米澤康雄		
〔管理課〕			
管理課長（兼）	米澤康雄	嘱託	吉田一男
課長補佐	森岡陽一	〃	山館昇
主事	阿部隆広	運転技士兼技能員	佐藤春男
〔調査課〕			
調査課長	昆野靖		
課長補佐	佐々木嘉直		
主任文化財専門調査員	小田野哲憲	文化財専門調査員	佐々木信一
〃	三浦謙一	〃	小原眞一
〃	工藤利幸	〃	村上修
〃	高橋與右衛門	〃	酒井宗孝
〃	平井進	〃	松本建速
〃	中村良一	〃	金子昭彦
〃	中川重紀	〃	濱田宏
〃	藤村敏男	期限付専門調査員	菅常久
〃	高橋義介	〃	相原伸裕
文化財専門調査員	斎藤實	〃	及川靖世
〃	佐瀬隆	〃	阿部勝則
〃	千葉孝雄	〃	菊池明芳
〃	斎藤博司	〃	及川渉
〃	東海林隆幹	〃	星雅之
〃	佐々木弘	〃	森下宏
〃	川村均	〃	鈴木知己
〃	鈴木貞行	〃	菊地幸裕
〃	伊東格	〃	藤村隆
〃	遠藤修	〃	千葉悟
〃	斎藤邦雄	〃	大久保茂
〃	神敏明	〃	熊谷博由
〔資料課〕			
資料課長	高橋薫		
主任文化財専門調査員	田鎖寿夫		

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第151集

比爪館跡発掘調査報告書

国道4号拡幅工事関連遺跡発掘調査

印刷　平成3年3月25日
発行　平成3年3月30日
発　行　(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020 岩手県紫波郡都南村大字下飯岡11-185
電　話 (0196) 38—9001～2

印　刷　山口北州印刷株式会社
〒020-01 盛岡市青山四丁目10－5
電　話 (0196) 41－0585

© 財団法人 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1991